

スタートは何度でも切れる

自分を映画の主役にしたのは初めて。耳が聞こえない中でどう他人と付き合つか、模索しながら自転車で日本を縦断した57日間を記録した。「コミュニケーションが苦手だったり、自分に自信が持てなかったりする人に、また頑張ろうと思ってもらえたら」と話す。生まれつき両耳が聞こえない。映画監督を志して米国の大学で

製作方法を学び、ろう者や難聴者をテーマにドキュメンタリーを撮ってきた。旅のきっかけは、読み書きを教え社会との懸け橋になつてくれた母の死。シヨ



### 人のけさ

聴覚障害を乗り越え自転車で日本を縦断する映画を撮った

いまむら あやこ  
今村 彩子さん

ツクで死にたいときもあった。好きな自転車で旅し、心のどこかで避けてきた健聴者とのコミュニケーションを見直せば、再び前向きに歩きだせるかも。それを作品にしよう。題名は「Start Line」。

同行者は、自転車店で働く友人の堀田哲生さん(41)。健聴者との会話に気後れる今村さんに「耳が聞こえないことに甘えている」と叱咤し続けた。時にぶつかり涙を流したが、それでも懸命にペダルをこぎ続けた。

編集作業できれいにまとめないようにし、ふがない自分の姿を残した。「できなかった」というのが旅の本質だったから。でも、スタートは何度でも切れると分かった。試写会では健聴者と難聴者を問わず「自分と重ねて見ってしまった」と共感の声が相次いだ。「旅を通して気負わず健聴者に話しかけようと思うようになった」。今後は聴覚障害にとらわれず映画を撮るつもりだ。名古屋で父親と祖母、愛猫と暮らす。37歳。(共同通信・鈴木沙巴良)